

改めて考えさせられた

震災への対応

北海道の港湾取扱貨物の約5割のシェアを占める苫小牧港。一昨年、3月11日に発生した東日本大震災の際には、北海道から1万人以上の自衛隊員が被災地に派遣されました。このときに人員、機材などの9割が苫小牧港を経由し災害支援として現地に送りこまれました。

幸いにも、主要な埠頭での津波被害を回避することができたために、災害・緊急時に港湾として大きな役割を果たすことができました。

今回のように道外で、あるいは北海道が災害にあつてしまった場合に、災害支援のほか、物流の拠点として日常の生活物資、産業、経済活動を下支えるためには、港湾機能をし

っかりと維持することが重要です。この度の震災では東北地方で港湾が使用できないために、物流経路が変わり、大きな影響が出たといわれています。

苫小牧港を経由して、本州から北海道に向けて多くの物資が入ってくる同時に、北海道から首都圏に向けて多くの農産物が輸送されています。災害時に港湾が機能できなければ北海道はもとより、日本全体に大きな影響をもたらすことが考えられます。

こうしたことから、苫小牧港では地震への対策として、今後5か年の計画により、耐震強化岸壁を含めた被災時の物流確保に向けた施設整備を進めています。また、荷役の形態も大きく変わり、クレーンで船に荷物の積み込みを行う物流から、船へ

直接トレーラーが乗り込む物流が主要となっているため、港内に建っている役割を終えた公共上屋を撤去して、災害時にも、荷役がしやすく、より円滑な物流ができるエリアを整備するなどの対策を進めています。

節目を迎えた

苫小牧港の新たな船出

日本国内において、港湾貨物の取扱量は順調に伸びている苫小牧港ですが、世界の中での位置を見てみるとどうでしょうか。世界の港湾から見ると日本の港湾はその取扱量も多いわけではありません。

現在は中国を筆頭に、韓国、台湾、ほか周辺諸国を中心に、人口増加や経済発展に伴い、経済や物・人の交流がますます活発化しています。今後は、こうした世界の社会情勢を把握しながら、苫小牧港の地の利を生かし、現在の東アジア諸国との海上ネットワークを拡大することが求められています。

また、各港が競争を繰り広げている時代となり、苫小牧港も港湾機能を整備し、経済活動が活発な諸国へその存在をしっかりとPR（ポートセールス 写真③）していかなければならない時代に入っているとさえ言えます。

北海道経済の生命線ともいえる苫小牧港。港湾が活気づくことは、北

波の音
心地よい潮風
港と親しむ空間

キラキラ
公園

港が魅力的で親しみのある場所として楽しめる、親水空間・キラキラ公園

みなとフェスティバル

①



②



- ①トレーラーが行き交い活気ある港
- ②耐震岸壁工事の進む西港区
- ③中国で行われたポートセールス
- ④苫小牧の魅力発信、観光PRのためのクルーズ船誘致活動を積極的に展開

日本丸



海といえば船。整備された公園で、行き交う船を臨むビューポイントで、クルーズ船なども来航してのイベントも開催されます

